

好奇心、学問究める

たゆまぬ努力

先駆者

長久保赤水「重文指定」

■中■



漫画「長久保赤水の生涯」で、赤水が東北を旅した際の記録「東奥紀行」の内容を表したページ

長久保赤水（1777～1801年）は現在の高萩市赤浜の農家に生まれ、幼い頃から勉強好きだった。

「読書に夢中になるあまり、頼まれた家事を忘れてしまうことがあったらしい」。赤水の研究を長年続けてきた赤水顕彰会顧問の長久保源蔵さん（89）が語る。

赤水は11歳になるまでに両親と弟をなくし、その後は継母に育てられた。源蔵さんは「継母は赤水のやりたいようにさせ、勉強好きを見守っていたのではないかと思う」。14歳頃には医師の鈴木玄淳が開いていた私塾に通うようになり、後に「松岡七賢」と呼ばれる仲間と学問を追究した。

藩主に制度改善「直訴」も



新しい伝記漫画の発行に向け作業する黒沢貴子さん＝高萩市内

もとは儒学を深く学んだが「好奇心で手を広げていった結果、天文や地理が肌に乗っていたのかな」（源蔵さん）と、地図作成の道に進んだ。

▽「農民疾苦」

61歳の頃、赤水は水戸藩6代藩主徳川治保に学問を教える侍講に抜擢された。赤水を推挙した郡奉行、皆川教純

は「いち農民学者が御殿に上るのは有史以来初めてのこと」と述べたという。

赤水は政治にも明るかった。1778年、治保公に対し、「農民疾苦」という書を上程。年貢取り立ての運用がいかにも農民を苦しめているか記し、改善すべき制度を具体的に列挙した内容だ。直訴などが禁じられていた時代で、処分を受ける可能性もあったが、最終的には改善に結びついたという。

源蔵さんは「個人的な欲で言わず、農民の苦しみを取り払ってほしいと訴えた。頼ま

れたわけでもなく頑張ったのは偉い」と評する。

▽漫画で伝記

高萩市の主婦、黒沢貴子さん（59）は2017年、赤水顕彰会の事業として伝記漫画を描いた。柔らかな絵柄と、化け猫を物語のナビゲーターとして登場させるなどの工夫で赤水の生涯を分かりやすく描いた。

資料を読み込み、かみ砕いて漫画として表現する作業の中で、赤水の人生は「ドラマチックで、成功のプロセスを踏んでいる」と感じた。11歳で父をなくし、生きていくため「変わらざるを得なくなつた」。地図作成では多くの人の助けを得た。そうした出来事が赤水の力になったと想像する。

漫画家を目指した時期があったが簡単な道ではなく、挫折を経験。赤水と自身を比べたとき「私は漫画を描きたいと思っても、誰かの役に立つと思った」とはなかった。

伝記漫画を読んだ人から「赤水のことがよく分かりました」と言われることで、役に立てたのだと感じられた。赤水との出会いが、自信と喜びにつながった。切り口を変えた漫画を来年新たに発行するため、再び構想を練っている。